

地域住民の意識調査に基づく都市公園の遊び場分析

徳島大学理工学部 賛助会員 ○吉本虎撤 宮崎大学地域資源創成学部 正会員 尾野薫
徳島大学大学院 正会員 山中英生

1. 研究背景と目的

近年、都市化による遊び場の減少、生活時間の変化など子どもが思い切り身体を動かして遊ぶ機会は減少傾向にある。日本学術会議:健康・スポーツ科学分科会¹⁾は思い切り身体を使った遊びは子供たちの成長に必要不可欠であることを提言している。また、思い切り身体を使って遊べる場所として公園があげられるが、遊具は老朽化や事故等が問題視され撤去や使用禁止といった事例が多数見受けられるようになり、広場はボール遊び等の禁止行為がある公園も増加し、子供たちにとって遊び場としての公園の魅力が失われつつある。しかし前述で述べたようなことは都市部で言われていることが多く、地方都市が取り上げられることはあまりない。そこで地域住民の意識調査に基づき地方都市における都市公園の遊び遊び場の変化を分析し、今後の地方都市における都市公園のあり方について一示唆を得て、地方都市の実態を知ることが目的とした。

2. 対象地の選定と現状

対象地となる 6 公園とそれらの現状を表 1 に示す。

3. 調査概要

各公園の周辺住民を対象としたアンケート調査を実施した。アンケートは各公園の誘致距離内に居住している全世帯に配布し郵送により回収した。桑野川防災ステーションのみ例外で、施設を利用している徳島県立富岡西高等学校のテニス部の協力を得た。アンケートの内容は自身が子どもの頃か最近の子供について回答してもらい、遊ぶ場所、遊びの内容、遊び場の選択理由、屋外遊びに対する意見等を質問し変化を分析した。

4. クロス集計による分析

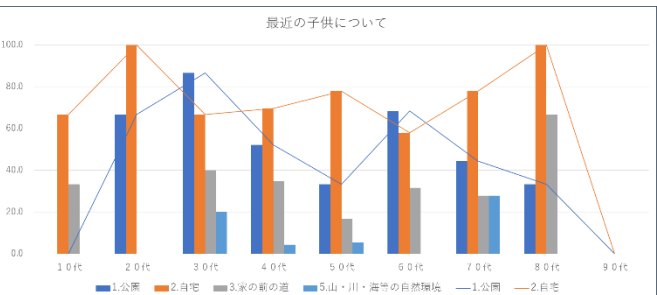
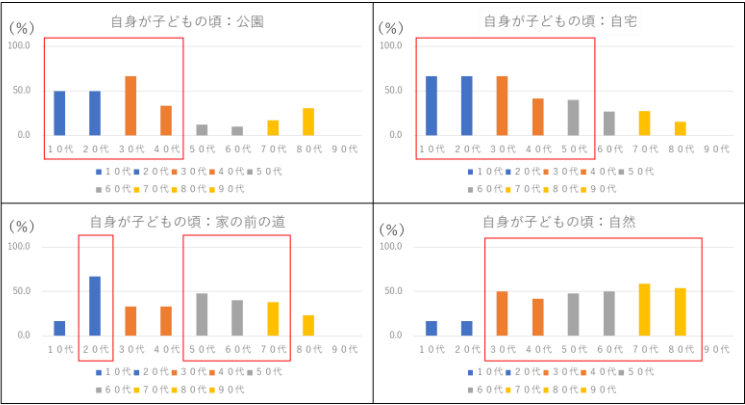


図1 (左) クロス集計による遊び場分析: 自身が子どもの頃
図2 (上) クロス集計による遊び場分析: 最近の子供について

クロス集計による分析を各公園と全体で行った。図1は全体の分析で、遊び場について回答者自身が子供の頃について聞いたものである。まず公園で遊んでいた人は10代から40代が多くなった。自宅は10代から50代、家の前の道は20代と50から70代、自然環境は30代以上で遊んでいた人が多くなった。次に図2は図1同様の質問を最近の子供について聞いたものである。20代30代60代で公園で遊んでいると考えている人が多いものの、全年齢層を見てみると自宅で遊んでいると考えている人が多くなった。また最近の子供では自然環境を遊び場にしている子供が少ないことがわかった。これと同じように遊びの種類と遊び場の選択理由も自身が子どもの頃についてと最近の子供についてで分析を行った。

5. 遊び場の変化

クロス集計による分析の結果、地方都市の遊び・遊び場の変化がわかった。図3に示すように年代ごとに主な遊び場の傾向が変化し、最近の子供は室内の傾向が強くなった。また、遊び場の選択理由は自身が子供の頃は自宅から近いため、自然が豊かなために多くの回答があり、最近の子供については自宅から近いため、室内のために多くの回答があり、遊び場の選択理由も屋内の傾向が強まった。

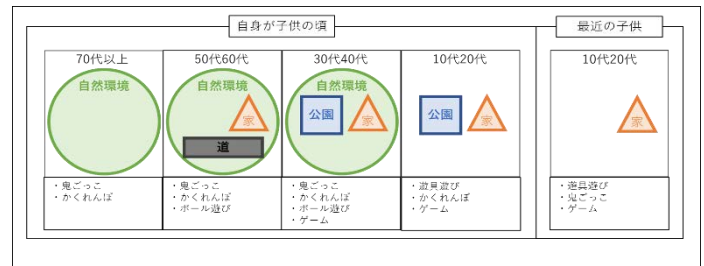


図3 遊び場の変化

6. 屋外に対する意見について分析

屋外に対する意見を自由記述で回答してもらいクロス集計の結果と現状を踏まえ分析をした。その一例に駅前児童公園をあげる。駅前児童公園は様々な遊具があり、昔も最近も子供たちは公園で遊んでいると回答している人が多かったにもかかわらず、遊具・遊び場に関するマイナス的な意見が見られた。駅前児童公園は遊具が多い公園ではあるが年齢が低い子供向けという印象があり、年齢が少し高くなると遊び場として物足りなさを感じるためこのような意見になったと考えられる。同様に対象公園すべて分析を行った。その結果、次のようなことがわかった。まず、自然に対しての意見が全体的に多く、子供の頃に自然とふれ合い自然の中で遊ぶことは良いと考えている人が多いことが分かった。次に、公園に対する不満が複数の公園で多々見られた。特に遊具に関しての意見と広場に関しての2種類の不満が目立った。これらの意見から、公園は屋外の遊び場の中で代表的な遊び場であるが、子供たちにとって遊び場としての魅力が失われつつあると考えられ、屋内遊びの傾向が強くなった要因の1つと考えられる。

7. 今後の都市公園

以上の分析より本研究では今後の地方都市における都市公園のあり方について一示唆を得ることができた。それを以下に提示する。①自然を組み込む：昔の子供たちは、自然で遊んでいたことが多かった。自由記述でも自然に関する意見は多く、地方都市の住民は自然と触れ合い遊ぶことにプラスのイメージを持つことが分かった。公園内に自然を組み込むことは難しいことではあるが木を多めに設置するだけでも公園でできる遊びの種類が増加し魅力が増すと考えられる。②機能の分配：1カ所の公園に複数の機能を集約し一カ所ずつ整備するのではなく、多種多様な遊具がある公園・ボール遊びを禁止しない広場のみの公園、少子高齢化に対応し健康器具のある公園といった何かに特化した公園を市町村単位で整備計画を行い公園同士、施設等とで連携する考えである。機能に応じて様々な規制があり複数の機能のある公園では規制行為が多くなるが、機能を分配することで公園ごとの規制の数が減り、地域住民は地域内で目的に応じた公園を選択することができるようになる。

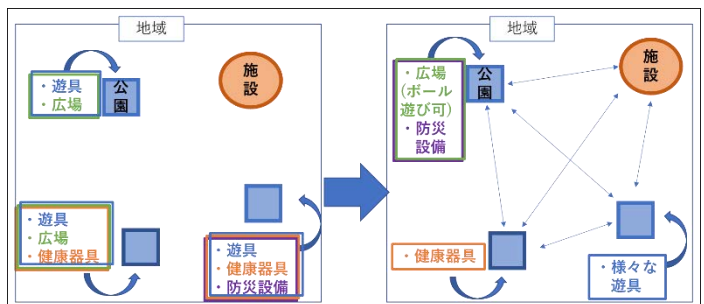


図4 機能の分配

8. 結論

地方都市における都市公園の遊び・遊び場の変化を分析した結果、昔の子供に比べ屋内の遊び・遊び場が増加していることがわかった。公園は遊び場としての魅力が失われつつあり、昔と比べ屋内遊びの傾向が強くなった要因の1つと考えられる。そのような現状に対し、自然を組み込むことまたは機能を周辺の公園や施設等で分配することが今後の地方都市における都市公園のあり方の1つだと考える。

参考文献

- 1) 日本学術会議:健康・スポーツ科学分科会の「提言:子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針」 平成23年8月16日